

ふるさと（地域）に学び、ふるさとを愛する個が育つ社会科学習

～バトンをつなぐ・思いをつむぐ防災教育の研究を通して～

梶本 久子

子どもたちがふるさとを愛し、自分たちの地域へのこだわりをもつこと。そして、考える力を作るために個を育てることが重要であること。この二つを実現するために、地域と個を連携した教育を中心に実施することを社会科指導の指針としている。本研究ではこの指針に基づき、子どもたちが、自治体、大学、企業やNPO等の地域のさまざまな人と交流を通じて、豊かで多様な学習をできるようにすることで、社会で起こっているさまざまな事象を考えるきっかけを作ることを目的とした。本研究の目的を達成するためには、ふるさとに学び、地域と連携した教育を実践していかななくてはならない。その基本となる教材は、ふるさとから見出していくことが必要である。ふるさとである和歌山は、自然豊かであるということと比例して、さまざまな自然災害も多い地域である。そのため、防災を学ぶということは、自然災害から守るということだけでなく、ふるさとのおかれた環境を知ることある。そこで、何が必要とされているのかという気づきを与え、実践していくというきっかけを学習できるのではないかと考え、本研究を昨年度に引き続き実施した。その結果、異学年にわたっての防災学習の交流が生まれ、地域との交流もできた。また、地域の連携を効果的な場面で取り入れたカリキュラムを構成することで、多様な集団・組織の中でのコミュニケーションや豊かな人間関係を築き、成長を果たしていく子、ふるさとに学ぶ子（個）を育むことができた。

キーワード：地域教育力、防災教育、地域DNA、ふるさと、学びをデザインする子どもたち

1. 地域教材活用の有効性

ふるさと和歌山にこだわり地域に学ぶ理由は、子どもたちが心のふるさととして、自分たちの生活する地域やまちなどを大切にすることを育てたいと考えたからだ。また、子ども自身が地域社会の中でさまざまな実情に目を向け、そこに暮らす人々と直接的なかかわりをもつ中で、学び、自らの思いや願いを表現し、問いつける主体的な活動が、地域社会に強い愛情や誇りをもつことにつながると考えている。

地域教材活用の有効性を、以下の4点でとらえた。

- ①子どもたちにとって身近であり、親近感を持ち、その中で生活することのよさを感じることができる。
- ②見学や調査を通して直接の経験による実感を伴った認識が可能であり、様々な人と出会い、資料や情報を収集するなど、多様性をもって地域の教育資源を活用することができる。
- ③実生活にとって切実感がある体験や知識を生かした思考・判断の場面を設定することができる。
- ④地域社会への愛着を育成でき、地域社会の一員としての自覚を高め、地域社会の発展を願う気持ちを培うことができる。

これら4点が、地域に学ぶことの有効性であり、これらの条件を満たす「ふるさと和歌山つくるプロジェクト」を1年間の学習の柱として計画した。

「ふるさと和歌山つくるプロジェクト」として、大きく3つの教材をあげたい。1学期は、校区探検で子どもたちの興味や関心の高かった「スーパーマ

ートM本店」を取り上げた。スーパーマーケットMを入口として、自治体や多くの企業が集まる和歌山の中心地である校区にあるスーパーマーケットの特徴と自分たちの地域のスーパーマーケットを比較することを大切にしたい。また、スーパーマーケットやコンビニエンスストアの協力で、子ども店長や宣伝・販売体験などそれぞれの特色をいかして『売る』ことを学んだ。2学期の朝の会では、自分の住んでいる地域の様子を紹介しあった。附属小学校に通学しているということで、自分の地域の様子を知らない子、一緒に遊ぶ友だちもいない子など、地域のつながりの薄さを感じた。「和歌山」を愛する個を育てるためにも、まずは「自分の地域につながる子、自分の地域にもどれる子」を育てたいと考えた。そこで、1年を見通し、2学期は「消防署・消防団」から、29人それぞれの地域の消防、防災と比較することで、さらに「自分の地域、校区、異学年、未来につなぐ子」を育てたいと考えた。3学期は「工場のしごと」で『作る』ことを中心にした学習をもとに、特色ある地域のものづくりから、自分の住む地域の防災やものづくり、まちづくりへと戻し、自分の考えを地域へ発信していくことを1年間の学びとして計画した。そして、1年を通して、地域の多くの教材と出会い、市役所、NPO、ものづくりやまちづくりをしている方などそれぞれの教材に関わる方々と繰り返し交流することを柱とした。そのことにより、地域を愛し誇りをもつ個に育つと考えたからである。

また、本研究を続けていくことで子どもたちは一面的・主観的な見方、考え方から、多面的・客観的に深

化していった。その中でも特に有効性を感じた②の“地域教育力活用”である。このことについて、防災教育を中心に詳しく述べたい。

2 「バトンをつなぐ・思いをつむぐ」防災教育

東日本大震災後、防災のあり方について多くのことが変化した。南海トラフ巨大地震の起こる確率は、現時点での地震研究では30年以内に87%という数字が出ている。ここでいう30年以内というのは明日かもしれないし、30年後かもしれないということである。これから30年間継続的に学習し、備えておくことは大変困難なことである。そのためにも、学校全体、また次の学年につないでいける持続可能な防災に取り組んでいくことこそが大切である。

本校も、昨年度和歌山市と「大津波警報時の一時避難場所」の締結というニュースが報道された。それをうけ、今年度は「避難場所」にむけての工事が、連日間近で行われている。子どもたちにとって身近に感じるこの時期だからこそできる学習があると考えた。

社会科における防災は、切実感がなく「非日常のこと」である。しかしこの「非日常のこと」を日頃から続けるために、日々繰り返される学習の中に組み込み、子どもたちが中心となって、学校・地域をつないで取り組んでもらえるようにすることこそ、持続可能な防災を実現するためのポイントではないだろうか。

3年生の子どもたちにとって「防災」というのは、切実感も出にくく大変難しい教材であり、保護者の考えにも大きな温度差がある。しかし、身近で子どもらしい視点から防災を取り上げることにより、3年生の今だからできることを考えさせたい。そのうえで、従来の防災教育、総合的な学習の視点「防災における自分自身」で終わることなく、社会科のねらいにそって「市民を守る社会の仕組み」を理解したうえで、3年生の等身大の自分自身が安全安心な社会の構築のためにどう参画していくかを学んでいくことを大切にしたい。

そうすることにより、地域や防災について切実感をもって調べることができた。

また、消防署、消防団、防災センター、大学、和歌山市などの防災教育に携わる人、保護者のボランティアなどから教わる今まで知らなかった事実と次々と出合わせることで驚きやハテナを呼び起こし、学習課題を追究していくエネルギーにした。このような出会いの一つ一つが、人々の願いや工夫を知るきっかけになり、その思いに応えようと子どもたちも、追究姿勢に深まりが出て、学び合うことができた。出合った一つ一つの教育力を「つなぎ、つむぐ」ことが、防災教育（学び）をデザインする子どもとなると考えたのである。

2. 1 「つなぎ」異学年交流

本校の研究テーマである「授業をデザインする子

どもたち」とは、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことだと考える。しかし、ひとり学習というと「調べる」だけで満足する子どもも多く、「調べたことをもとに考える」ことができる子どもは少ない。年間を通して、地域素材の活用や生の声を聞き取る活動を大切にし、子どもたちが自分とのかかわりから事象がとらえられるようにすることで、自分の考えをより深めることができる。

「防災教育」は、明日の備えが10年後、30年後にも生かされなければならない。しかし、継続的に備えることは大変難しい。つまり、課題として、使命感をもって「つなぎ」取り組みがあげられる。

4月から子どもたちは、インタビュー、アンケート、ゲストティーチャーからの話などいろいろな方法で学習を進め、意欲的に学習していた。1学期の「売る」学習で、昨年度担任した子どもたちに「子ども店長」について語ってもらう時間をとった。子どもたちにとっては、よく知っている4年生のお兄ちゃんお姉ちゃんが、子ども店長の楽しさだけでなく、社会科の調べ学習の楽しさまで話してくれたため、多面的に考え、深めることができた。4年生のアドバイスが3年生の子どもたちの心を揺さぶったのである。1学期の経験から、2学期も同じように防災について話してもらう時間をとった。今まで担任した6年生、4年生の子どもたちは、「子ども店長」以上に防災の学習で考えを深め、自信をもって取り組んできたため、登下校中や休憩時間を使って詳しく説明してくれる子どもも多かった。

今まで作成した「防災マップ」や「防災宣言」「和歌山市・附属小の防災ジオラマ」などを見せて、実際にその時の思いを詳しく話してもらうことにより、少しずつ自分事としてとらえ始める姿が見えてきた。そして、その学びを防災の意識が低い家の人や地域の人に伝えたいという思いに変わった。つまり、切実感が生まれにくい防災の学習であるが、多くの人に防災を伝えなければいけない、大人の考えを変えたいという「使命感」が生まれたのである。使命感をもって、様々な活動を進める中で自分たちの住んでいる地域への思いをより強く持ち、自分の思いや考えを確かなものにする事ができた。

そして、学んだことを今度は劇化やポスター、よびかけなどで低学年へ伝えることで、より一層、自分の考えを吟味することができ、3年生なりの学び方を身につけたのである。

昨年度も、異学年交流を進めていく中で、1年間という短い期間の教育ではできない学びの連続性、持続性を感じた。この学びを今年度は、さらに「つなぎ、つむぐ」ことによってより大きな成果になった。また、学校全体に広げていくことで防災教育の必要性を問うこともできた。そして、子どもたちが今後も持続性のある防災教育を進めていくことで、意欲的に追究し、自分で問題を発見し、問題解決の過程でいきいきと学

び合うことができると考えている。学校全体に広がった防災教育をもとに、その追究姿勢を大切にすることで、自分を見つめなおし、未来への生き方へとつなげていける子になっていくと考えている。

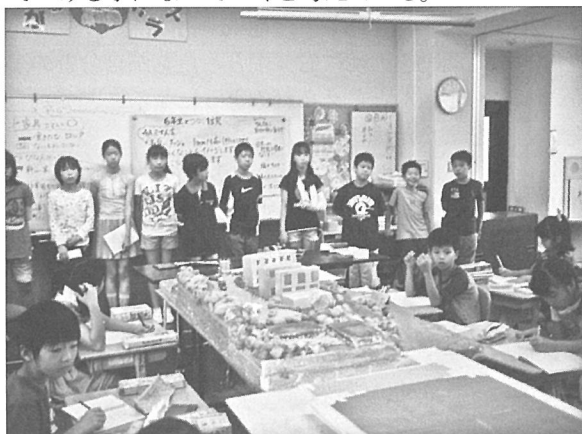


図1 6年生に学ぶ

2. 2. 「つなぐ」 地域交流

1学期初めに本校の1km先で大きな火事があり、そのため渋滞になった経験やサイレンの音をたくさん聞いたと話す子どもも多かった。しかし、実際に火災を見たという体験がなく、火災の怖さや悲しさを知らない子どもがほとんどである。子どもたちにとって火災がない安全な暮らしは、当たり前のものであり、火事に対しての実感が無いのが実態である。また、火事が起きたら、消防署の人を呼べば消してくれるという認識を持っており、地域を守る連携やそこに従事する人々の日頃の苦勞や思いに気づいている子はほとんどいない。

そこで、消防署や消防団、関係諸機関、学校や地域の消防設備について具体的に調べることで、それらの諸機関が平素から火災に備えていること、緊急事態には関係機関と協力して一刻を争って事態に対処して地域の人々の安全な暮らしを守っていることを理解できるようにした。また、本研究をすすめていく中で、実は消防署の人以外にも、普段は別の仕事に従事している人たちが消防団を組織して、消防署と連携しながら初期消火や防火活動などを行っていることを知り、消防団の人たちは、自分たちの地域の安全は自分たちで守っていくという強い願いをもって活動していることをとらえることができた。そして、子どもたちは、自分たちの安全・安心な暮らしを誰かに守ってもらうのではなく、地域の一員として積極的に自分たちで守っていくことの大切さに気づいた。活動の中で、繰り返しコミュニケーションをとることにより、お互いが親近感を増しただけでなく、早い時期から、和歌山の安全を守る方々の思いや願いに気づくことができた。それを一つ一つ確かなものにしていくため、和歌山市の総合防災課や消防署、地域の方々の所へ何度も訪ね、交流し、多くのことを教えていただいた。何度か交流をする中で、学んだことや調べ学習、話し合いの結果を

直接伝えたいという思いを持ち、劇化やポスター作りへとつながっていった。単元の終末には、それぞれの一人一人が、責任をもって学んだことを、本校を避難場所と考えている地域の方々に「防災かわら版」として発信するようにした。そのことにより、地域だけでなく、多くの和歌山の人伝えたい使命感やこれからの生活に生かしていこうとする意識が育ち、学びを深めることができた。そういった活動の中で、お互いが親近感を増すことでなく、自分の生活を振り返り、これからの生活に生かしていこうとする意識が育つのではないかと考えた。

2. 3 「思いをつむぐ」

出合った一つ一つの地域の教育力、異学年交流による学びをつなぎ、つむいでいく。つまり、点から線、線から面、面から立体的につないでいくことが、思いを深め、思いをつむぐことになると考えた。

4月から子どもたちは多くの地域の方に出会った。

学習を進めていく上で、出会わせ方を工夫し、どの方にも固有名詞で呼べるように、出会いを大切にしてきた。防災の学習は知識だけで終わることが多く、学習をすすめていく上で難しいと言われている。3年生として、和歌山市の防災の取り組みや市役所の仕組みについても学ばなければいけない点も多くあると思うが、3年生らしい素直で柔らかい感性で、まずは出会った人に興味をもち、好きになることから防災のことを学んでいくことが大切なのではないかと考えた。そのことにより、ひとり調べの必要性、目的意識や切実感をもち、防災への思いが深まった。さらに、その思いを地域へと発信していくこと、その知識を地域と共有することが大切だと感じた。

つまり、今後も防災教育を地域と継続的に交流していくことで、地域DNAとなることをめざしていきたい。

2. 3. 1 「思いをつむぐ」 地域への発信

子どもの考えは表現することによって表出され、目に見える形となる。そうした表現方法や発信の場の充実や工夫が大切であると考えている。そして、子どもが自分だけでは思いつかなかった見方や考え方を発見できることが社会科の「考える面白さ」なのである。

自分の考えを発信することにより、考えを明確にすることができる。そして、友だち相互に刺激し合う中で、自分の考えを修正したり、深化させたり、発展させたりしながら、共通点や相違点を探し、課題の共有化ができる。さらに、調べたことを発表した後に話し合いをすることにより、自分の考えをより深めることができる。また、話し合いの中で出てきた個々の課題を発表し合い、同じ内容毎に分類し、課題を確かめ合うことで、クラスの学習課題が考えやすくなり、調べる課題の必然性が明確になり、意欲的に調べ学習がで

きようになると考えている。本研究でも、グラスで学習課題を考え、話し合い活動を行った。その授業の終わりには、問いに対する今の自分の考え、友だちの考え、それを確かめる方法を視点に振り返り、交流する活動をつくった。そうすることで、次の調べ学習の目的や方法を明確に意識できるようにしたのである。

また、社会科と並行して総合的な学習で、防災をテーマにした劇(集会、学習発表会)、校外で和歌山市の住民に消防や防災の啓発をする活動を積極的に取り入れた。そうすることで、防災を視点に一人一人が地域の代表として調べ、自分たちの生活を見つめ直すきっかけをつくりたいと考えたからだ。

また、地元企業や大学生とのコラボレーションのカフェ事業(カフェを大学生と一緒に企画運営し、郊外の不特定多数の住民に学習を発信する場)、さらに子どもたち自身が地域素材をもとに企画運営するカフェなどを中心に「ふるさと和歌山つくるプロジェクト」の取り組みを発信した。和歌山市や校区のジオラマを用いたのプレゼンテーション、和歌山市の防災の施策の紹介、防災クイズ、劇化、防災グッズ作りなどワークショップ活動など様々な表現活動を行った。その際には、異学年交流で学習した4、6年生も一緒に劇化したり、防災グッズ作りをしたりして共に学習を発信することができた。そして、お互いの子どもたちにとって、より多くの人に伝える大きな原動力となった。多くの場や人の前でプレゼンテーションやワークショップなどの活動を繰り返し行うことによって、表現力、防災意識の向上等、子どもたちの大きな変容が見られた。



図2 防災の劇を発表(カフェ)

2. 3. 2 「思いをつむぐ」地域との知識の共有

社会科・総合的な学習を通して地域の未来に対する強い思いを校内外の多くの人に発信した。地域住民、保護者対象のアンケートの結果、保護者からは、地域の多くの方々が、子どもたちの学習を高めてくれる貴重な指導者になってくれたことへの感謝や和歌山の防災のよさや課題を発見したという意見をもらった。

また、地域住民からは「防災をもっと勉強しなければ

いけないと思った」「子どもたちの強い思いが伝わり、自分たちも意識を高めなければと感じた」という啓発につながった意見も多く寄せられた。

1年を通して多くの地域の方との交流や調査から、和歌山の防災の願いを実現していく地域の人々の工夫や努力について考える力が育った。また、発信という形で、学習に関わってくださった多くの方々を招待したり防災かわら版で説明する機会をもったりしたことで、出合った一つ一つの地域の教育力をつなぎ地域DNAとしていくことの第一歩となったと感じた。

3. 授業実践

(つなぐ・防災(持続可能な防災)

～くらしを守る消防のしごと～)

本単元は、学習指導要領第3・4学年の内容(4)「地域社会における災害及び事故の防止について、次のことを見学、調査したり資料を活用したりして調べ、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々の工夫や努力を考えるようにする。」(ア関係機関は地域の人々と協力して、災害や事故の防止に努めていること。イ関係の諸機関が相互に連携して、緊急に対処する体制をとっていること。)に基づき、地域における「消防署」を取り上げた。

この内容について、本単元の前半に「公助」の消防署について理解し、後半では消防署だけではなく、地域の消防団、自主防災組織といった「共助」の取り組みに着目した。これらの「公助・共助」それぞれ取り組みを知ることや「自助」について考えることで、安全なくらしを守るとはどのようなことなのかという子どもの社会認識を発達させることにつながると考え、本単元を設定した。

3. 1. 単元目標

- ・火災や自然災害から地域の人々の安全を守る人や仕事について関心をもち、調べる活動を通して、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々の工夫や努力を考えるようにする。
- ・自分たちが住んでいる地域でさらに安心してくらすために、多くの人からの聞き取りや調べ学習を通して、様々な考えやアイデアを出すことができる。

3. 2. 学びをデザインするために

身につけさせたい4つの力

上記の目標をもとに、本単元では、学びをデザインするものになるものとして「つなぐ」をキーワードとして考えた。常に地域の人や異学年の子と防災で「つなぐ」子どもたちを育てることにより、学びをデザインする姿が見られると考えている。そして、この単元を通して、めざす子ども像、つけたい力4点を育てることで「学びをデザインする子ども」になると考え、設定した。

①自分の課題を進んで調べようとする力

自分が地域の代表であるという目的意識をもつことで学習意欲が高まり、進んで調べ学習をしたり、安全を願う人の思いをインタビューしたりする学習に取り組むことができる子ども

②調べ活動の仕方（アンケート・インタビュー等）を学ぶ力

家の人に防災について聞く活動、地域の人、安全に携わる人にインタビューする活動など、課題を追究するための体験活動を取り入れることで、課題解決のためにどんなことを調べたらよいか考える子ども

③目的に応じた方法で分かったことをまとめる力

ICT機器を活用したり、相手を意識した話し方をしたりすることで、調べたことを分かりやすくまとめたり、発表したりする子ども

④いろいろな人とかかわる力

まとめたことを話し合ったり、他の学年や家族、地域の人に発信したりすることにより、新たな課題を見つけることができる子ども

次の「3.3」「3.4」では、特に①④について詳しく述べたい。

3.3 学級風土づくり

3.3.1 育てたい力

子どもたちが「表現することが楽しい」「自信をもって話したい」を思う学級風土をつくりたいと考えている。そのためには、違いを受け入れ、友達のよさを知ることが大切であると考え、学校生活の大半を占める授業の場で“友達の考えのよさ”を見つけることからスタートした。授業の終わりには振り返りをし、友達の考えを再認識させる機会を多く持った。お互いの意見を認める考えのふくらみを毎日の学級便りで紹介したり、読んで聞かせたりする中で、安心して自分を表現する楽しさを味わえるようになってきた子どもが増えてきた。そこで、「一人一人がのびのびと自分らしさを出し輝いてほしい」と呼びかけた。その一つ目の願いのもと、学級風土づくりを始めた。

「ふるさと和歌山つくるプロジェクト」の「つくる」とはものづくりが中心である。しかし、友だちとともに学び合い聴き合う中で、新しい自分を「つくる」という願いもこめている。そして、友だちの意見を受けて話し、学び合うことで自分たちの授業を「つくる」子どもになってほしいと思っている。そして、対話学習をすすめていく中で、自分たちの考えの根拠を確かにしていく楽しさや友達と意見を練り上げ深めていく面白さを感じさせたい。そこで、「表面的にとらえて満足せずにものごとに最後まで取り組んでいく粘り強さをもってほしい。」という二つ目の願いをもち、これら2つを『育てたい力』とすることにした。

3.3.2 めざす学級風土に向かって

上記の2つの『育てたい力』のために下記のことに重点をおいて取り組んでいる。

・表現力をつけるために

話し合いの原点である朝の会や道徳の時間を「聞き合い学び合える場」として大切にしている。話をしっかり聞く態度と発表の仕方を指導し、学び合う力を身に付けていく。また各教科でも「心に響いた意見」を中心に作文や振り返りカードを書き、お互いの意見を多く認める文章の紹介をしている。（発表カード、スピーチ、心のアンテナ、近ごろ変わったことなど）、また、教室環境を工夫し、学習の足跡（掲示物）を使ったり、一人一人の立場表明（資料やアイデアの情報交換簡単に）をしやすくしたりするよう支援することで、自分の思いを堂々と話せる学級風土をつくっていった。

・子どもの疑問が問いに変わるとき

一人一人の調べ学習の驚きや疑問をテーマごとに教室に常掲し、子どもたちがその中からさらに調べたり、意見交換しあったりする場を多く設定するようにしている。自分の疑問や感想を一人一人発表し、全員の考えを知ることにより、自分の考えに責任をもつとともに意思表示できる喜びを感じることができると考えた。子どものこだわっている課題は、個々に違いがある。子どもの疑問を出し合うことで、矛盾する考えや不思議だなと思われることに気づく子がいる。その矛盾や気づきを取り上げ、話し合いを通してクラスの学習課題とした。個々の子どもたちの見方、考え方を生かした話し合い活動を位置づけることにより、子どもの疑問が淘汰され、問題意識がさらに醸成していくのではないかと考えている。

3.4 「つなぐ教育力」の活用

本単元では、3.2の④のいろいろな人とかかわり（つなぐ教育力を活用する力）、学びを深めることができた場面が多くみられた。その中でもA児の作文を中心に3例挙げる。

・6年生Y君、Mさんとともに

子どもたちは、インタビュー、アンケート、ゲストティーチャーからの話などいろいろな方法で学習を進め、意欲的に学習していた。前述の通り、以前担任した4年生、6年生に来てもらう機会を作った。同じ子どもの視点で話してくれたことが子どもたちにも大きな学びとなった。4年生からは附属小が避難所になったいきさつを聞いたり、非常用持出袋の工夫を見たりすることでいろんなハテナがうまれた。特に「附属小が避難所になったということを知らない地域の人がたくさんいるよ」という言葉に、自分の地域でもあるS君が「あかんやん。みんなにとことん広めなきゃ」と大きく反応した。その言葉をキーワードに地域の人たちの防災意識について「とことんインタビューしよう」

ということにもつながった。

また、防災の思いが強い6年生のY君やMさんとは4月からたくさんのかかわりをもっていた。とくに本単元に入ってからは、多くのアドバイスをもらい、さらにそれぞれの自分の考えを深めることができた。

Y君が毎日のようにクラスにきて防災の思いや経験を語ったり、自作のクイズや新聞を紹介したりしたことは、子どもたちの心に深く刻まれた。また、Mさんも、わかりやすいイラストをそえて、一人一人に6年生らしい視点で詳しくアドバイスした。子どもたちは2人の知識はもちろん、その思いを感じ取ることができ、本研究の防災の「使命感」につながっていった。

4年生は3Cに比べてうんと防災のことに詳しくかった。例えば夜も道を確認したり防災グッズを玄関にしている。ちゃんと地震のことを考えて段ボールや新聞紙もあったかいらしい。私は全員の家族の写真をいれておくといい。ペット（犬）も全員が助かりたい。

今日、Mちゃんが来てくれた。昨日も一昨日も来てくれた。ファイト新聞の本もかしてくれて、Mちゃんが作った新聞ももらった。それを見て私も作ろうと思っている。Mちゃんは何でもできるし、何でも知ってるしあこがれの6年生です。私も6年生になったら、Mちゃんみたいに防災のことを下の学年に伝えたいな。

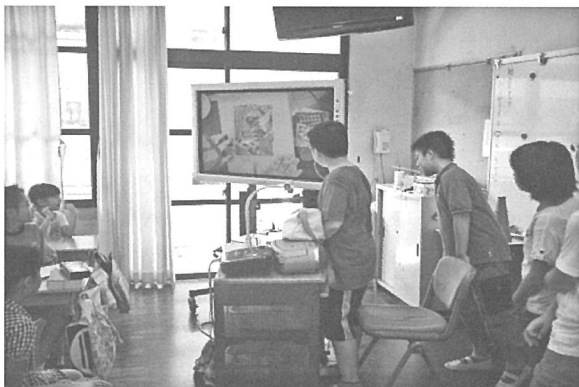


図3 Y君の説明

・和歌山市の防災と東日本大震災について

和歌山大学防災教育センターの客員教授 I先生に来ていただいた。ライフラインの説明やトイレの大切さなど被災地を見て、多くの人に伝えている経験から、わかりやすく話していただいた。その後、3.11メッセージという映像を6年生とペアになって観た。東日本大震災というと、津波や建物の映像が多いが、今回の映像は人や家族、子どもにスポットをあてているため、その現実を目の当たりにし、多くの子が涙を流し、震災のもたらした悲劇や、被災した人々の強さを感じ取っていた。



図4 I先生に学ぶ

防災を学習しはじめた子どもたちにとって、映像は強烈な印象をのこした。時を同じくして、和歌山市総合防災課のOさんにも来てもらった。子どもたちからは附属小に和歌山市の備蓄品がないということについての質問が多く出た。Oさんからは「一時避難所になるので和歌山市からの備蓄品はおいていないこと、和歌山市の備蓄品は備蓄倉庫に24000人分あること、地域の声が大きく避難場所になったが、大津波警報のときだけに限定されていること」などを教えてもらった。具体的に答えてもらったことで、子どもたちにとっても現実の問題として考えるきっかけになった。また、和歌山市の防災対策や公助、共助についても話していただいたため、「消防署だけでなく、いろんな人が和歌山市の安全を守るためにがんばっていることがわかった」と書いた作文もたくさん見られた。また、Oさんのより多くの人に防災について伝えようとする思いや、市の防災対策の工夫や苦勞を知り、それをもとに地域をよりよくする考えを深めることができたようになった。その後、地域のハザードマップを見直す子、防災家族会議をする子、一緒に和歌山市の防災無線に耳を傾ける子、地域の人へのインタビューをする子、防災グッズ作りをする子などが出てきた。そして、周りの人に和歌山市の防災の対策や工夫を伝えることで、実際に、人々の願いや取り組みを意識し始める子も出てきた。市の総合防災課の方とのかかわりなどを通して、地方公共団体の仕組みや役割、和歌山市の防災にかかわる人の思いについても気付くことができた。



図5 Oさんに学ぶ

〇さんってすごい！

この前、I先生の映像をみて、本当にこわくなった。避難所があんなにごちゃごちゃしていて、犬も死んじゃうかもしれないし、あんなに大変な暮らしだとは思わなかった。I先生は水がいいっていい。私は1日3L×家族の人数×3日分も用意していないので心配の気持ちが強くなってきた。簡易トイレをつくるのにスーパーの袋がいるってことも初めて知った。じゃなきゃきたないところでトイレをすることになるのはいやだと思った。だから和歌山市はどうか、わたしの家は大丈夫なのか心配になって、寝れなくなっていました。でも、今日〇さんに教えてもらっていろんなことがわかりました。和歌山市や〇さんが防災のことを考えて工夫してくることを知りました。まだまだ心配はあるけれど、少し安心の気持ちも出てきた。〇さんは5人以上集めたらみんなのために休みの日も家に来て話をしてくれるって聞いたので、わたしの家でも来てもらって話を聞きたいと思った。そんな風に和歌山を守っているってすごいことだと思う。まだまだわからないこともいっぱいあるけどがんばりたいな。

・地域住民にインタビュー

3年生の調べ学習は、聞き取り調査、見学で見たこと、感じたことを中心になるべく具体的な「もの・こと」を大切にしていきたいと考えている。自ら学び、調べ、考える力を育成するためには、1年間の中で、社会的事象を作業的・体験的な学習や問題解決学習等を通して、学び方を身に付けるような学習の工夫を考えた。「学び方を学ぶ」ために、1年を通し、発表、インタビュー、調べ方ガイドブックなど、3年生の発達段階にそった学び方カードを中心に細かく指導してきた。「学び方を学ぶ」ということは、教科書や地図帳・資料集・パソコン・インタビュー活動等を活用し、情報収集する技能、表現する技能・話し合う技能などを高めることはもちろん、多面的・多角的に思考・判断するといった問題を解決していく筋道や思考の方法を学ばせていく「プロセス」を学ぶことでもあると考えている。こういった「学び方」が、生きる力となり、生涯にわたって学び続けるための基礎を培うことになると考える。そこで、今までのインタビューの経験をいかして、校区のいろいろな方にグループに分かれて地域の防災について聞き取りに行った。地域の方々は、子どもたちの聞き役でいてくれたり、東日本大震災のボランティアの様子など貴重な意見を話してくれたりした。また、私自身も昨年のインタビューに比べ多くの人の防災意識の高まりを実感した。

子どもたちは地域の方々の不安な思いに心を痛め、防災対策の話に身を乗り出し一生懸命メモをとっていた。防災意識の高い人がいる一方で、防災対策をあきらめてしまっている人、避難所を知らない人などが多くいて、その意識の違いに驚く子どももたくさんいた。イ

ンタビュー後「もっと、附属小の避難場所のことを伝えなくちゃいけないし、どんな防災グッズが大事か、安心な道はどこかわかってもらわなくっちゃ」と話し始めた。子どもたちにとっては、自分の住んでいる地域でないということから、切実感をもって取り組める子は少なかったが、伝えたいという「使命感」が大いに高まったと感じた瞬間だった。



図6 地域の人にインタビュー

今日は、グループでたくさんの人にインタビューしました。S君が「あかんやん。みんなにとことん広めなきゃ」っていったから、その言葉をキーワードにして地域の人たちの防災意識について「とことんインタビューしよう」ということになったんが面白いなって思っていました。「附属小学校が避難所になることを知っていますか?」「津波警報が出たら附属小学校に避難しますか?」「どんなものを避難所においてほしいですか」などを聞きに行きました。

連合自治会長のNさんは「附属に行くことはもう殆どの人が知っているけど、一番困るのは地域で避難訓練をしていないこと、足の悪い人や危ない道なんかも知らなくちゃいけない」と言っていたのが心に残った。

今まで知らなかったけど、地域の人が一生懸命地域の人のために防災を考えているんだなと思いました。

4年生や6年生のMちゃんが言っていた通り、もっと地域に知らせなくちゃと思った。そして、今の附属の子にももっと伝えなくちゃいけないと思いました。

4. 単元の考察

4. 1 対話型学習の中で



図7 自分たちで作った附属小のジオラマで説明

本時では、子どもたちの課題作りの中で出てきた「備蓄倉庫（3Cコーナー）に何をに入れる？」というS君の課題について話し合った。意見交換の際、「水」「食料」「新聞紙・ダンボール」「元気づけるもの」の4つに分かれた話し合いを位置付けた。その中で、各自が自分の考えや願いの根拠を持ち、今までの学習を振り返りながら授業に臨むことで、自信をもって発言できた。

課題については、子どもたちの発達段階を考えると防災という目に見えないことに対するの難しさや厳しい現状、また、地域に帰ると附属小とは別に避難所があること、実際に避難してくる人数が調べてもわからないことなど、課題として適切なのか大変悩んだが、子どもたちにとって、備蓄倉庫の中の3Cコーナーというのは身近で自分事としてとらえやすいのではないかと考えた。また、自分たちの地域の問題点や現状としっかり向き合ったあとの課題であったため、子どもたちから「自分の非常用持出袋と同じ様に考えるよ」「ぼくらの附属小を何とかしなくちゃ」という声が多く聞かれた。そして、避難所の工事を毎日見ているうち、「附属小がどうして避難所になったのか？」「備蓄倉庫がせまい」ということを考えが出て、自然な流れで出た課題だけに多くの子どもが関心をもつものでもあった。それぞれの子の思いを大切に、自分の周りの大人だけでなく、地域の方々、防災を学んだ6年・4年の子どもなど、いろいろな立場の人に話を聞く機会を設定した。また、保護者にも協力をよびかけたため、休みの日に、周りの人など多くの人にインタビューやアンケートすることで意欲的にひとり学習を進める姿もみられた。そこで、3年生らしい「足で稼ぐ」調べ学習から、多様な立場の人の思いや願いに気づくことができるのではないかと、また、学び方を学んでいくうちに、持続可能な学習につながっていくのではないかとこの思いがあった。そのためにも、教材と向き合い、じっくり自分の考えが持てるようひとり調べをする時間を保障した。本時ではそういったこれまでの調べ学習が話し合いの中で生かされるような場になった。そして、4つの意見の根拠を出し合うだけで終わることなく、さらに未来や地域へつないでいくことを話す中で、前向きな提案を出す子も出た。

特に、元気づけるものと思っている子の中には、6年生と相談しながら、課題に深く向き合い「自分たちには何ができるのか」「地域や附属小の未来のために」という思いをもつ子がいて、その子たちが焦点化していく場面で、学びをデザインする子どもたちの姿を見ることができた。

4. 2 授業記録より

課題「附属小学校の備蓄倉庫（3Cコーナー）に何を
入れる？」 一部抜粋

まみ : まみね。水をいっぱい入れたらいいっていう

てたやん？でも、あきとくんの話を聞いてても、附属小に3000人以上きたらって思ったら、食料が足りなくなるから死んでしまう人もでてくるかもしれへんって思ってきたんよ。みんな「人の命を助けるため」と言っているけど、いっぱい人がきて、食料なくなって津波に巻き込まれて死ぬ人より、食べられなくて死ぬ人も多くなるかもしれへんやん？そう思うとやっぱり迷ってきた。

あきと : まみちゃんはそんなにいうけど、でもそういうときのために非常用持出袋に3日分は入れとくといいってOさんいってたやん？それに、物資が届くまで約3日と言ってたやろ？だからいっぱい来ても大丈夫なんちゃう？それにいっぱいの人きたら余計、やっぱりぼくは、食料や水より、さっきもいうたけど、東日本大震災で子どもが作ったファイト新聞みたいに元気づけるものがあつた方がええと思うんよ。

ゆか : 元気づけるものに続けて、備蓄倉庫の中のこの「3Cコーナー」って3C専用みたいな名前になってるやん？こんなにしたら、今年はいええけど・・・だって、今私達は6年や4年生の梶本先生のクラスのMちゃんやY君とかいろいろな子にいっぱい教えてきてもらって防災をつないでいるやん？

だから、今度は私達が1年や2年に教えたり、高学年の子とかとも一緒に協力するために、3Cコーナーって決めつけずに名前を変えた方がいいかもしれへん。

C (口々に) : ええな。それ！いいと思う。賛成

教師 : 名前変えたらいいの？

ゆか : うん、元気コーナーとかファイトコーナーとかにしたらええと思うんよ。

教師 : なるほど・・・

ゆか : だって、(備蓄倉庫の図面をさしながら) そのファイトコーナーとしたら、それ以外のところに空いているとこいっぱいあるやん？だから、ここに水を積み重ねていったらいいし、食料だったおいておける。このコーナーは違うんよ。他の避難所にはないものをおくのがいいと思えへん？それに、前にスーパーマーケットの勉強で吹上地区ってお年寄り多いって調べたやん？お年寄りもいっぱいいるから余計元気づけられたらいいものがあると思うんよ。だって、心が落ち着かないと食欲もわけへんと思うし・・・

C (口々に) : ええな。でも・・・ 大賛成!

ゆか : だから、Sちゃんと一緒に3Cコーナーをどうしたらいいか模型を作ったんやけど。(模型を指さして) こんなふうに、地震とかこない

ときでも、いつでも、おくやままつりとかのときとかに、地域の人にも観に来てもらうん。

「がんばれ」って言葉は、被災しているみたいになるから、勉強になることをおもしろく書くといいし、近くの防災マップを書いておけば郡附属に来るまでの安心・心配の場所もわかる。本当は水とかも全部必要だと思う。だから、それぞれの防災の大事さを伝えるコーナーにして続けていくといいんじゃないかな。

まゆこ：私は元気づけるもので絵をかいて・・・

教師：まゆこちゃん、ゆかちゃんのことに賛成しているの？

まゆこ：そう、賛成しているんだけど、ゆかちゃんみたいにして、地域とつなぐことで、震災がおきても大丈夫だと思いませんか？

C：うん。

しんた：さっきから聞いてて、みんなに言いたいんや(S君)けどよ。地域とつなぐのは、ゆかちゃんやまゆこちゃんとかの意見を聞いたら、賛成になってきたんよ。だって(図面をさして)ここも、ここもここも余ってるやん？余っている場所にダンボールとか、新聞紙とか水とかいれて、このコーナーにはオリジナルのものを作ったらどう？前にスーパーMの勉強のときもそうしたやん？本店オリジナルで、しかも自分らができるものがええってなったやん？みんなもそう思うへんの？そうやろ？なあ、オリジナルのものをつくろうよ。

京平：ぼくもしんた君に賛成で、やっぱり、そんなふうにしていくことで、地域にもつなぐし、附属っ子の未来につなぐ。そのためにも、このコーナーはオリジナルで他の避難所にはないことをするんがいいと思う。みんなはどう思う？



図8 ICT 機器(タブレット端末)で説明

みとりとしては3Cコーナーをさらに未来や地域へつないでいくことを話す中で、前向きに変える提案を出す子がいると考えていたので、そのときには立ち止まり、全員で考える時間をとるつもりであった。しかし、全員で練り合っていく中で、まみが出てくるところから子どもたちの考えが変わっていった。そして、

ゆかやしんたが課題を焦点化していく場面がみられた。多くの方から得た断片的な知識が概念的・統括的な知識に高まった。そして、練り合い、高め合いの場(学びをデザインする子どもたちの姿)となった。

4.3 みとりと支援

・個が生き、個が育つために

子ども一人一人に目を配り、みとり、評価すること、そして、その評価に基づいて、その個をどう育てたらいいかという視点を持ち、具体的な姿を思い浮かべて個に応じた指導を繰り返すという姿勢が重要だと感じている。「調べることは好きだけど、みんなの前で話すのがすごく苦手」と話すB児に対しては、積極的に手を差し伸べ、B児のよさや思いをみとることで適切な支援をしていこうと心がけた。そして、B児が調べたものを資料として全体に提示し、「みんなの学習に生かされている」という自信をもてるようにした。また、消防署の見学では、B児が大好きな携帯端末を使わせ、特に知りたい所を動画撮影させた。B児にとって、戻って来てから何度も確認しながら対象と深くかかわることができ、作文を書くときに自分の気づきをたくさん書くことができた。子どもたちが学習の中で自分の思いや考えを「表現したくなる」時、対象となるものやことに自分の思いが深まっていくことが重要であると考えた。B児への支援の仕方として、視覚的な部分を大切に、繰り返しかかわること、予想を大切に、その違いを一緒にみつけてかかわること、今までと違う新しい発見を求めて、探しながらかかわることが大切であると感じた。また、個をみとることにより、「B児に対しては、調べたことを自信をもって発言できるように場を設定したり声かけしたり細かい支援が必要」という具体的な支援の方向性が見えてきた。

個が生き、個が育つための土台は、子ども理解にあると改めて感じている。

・評価を学習のバネに

一人一人が学びのプロセスや活動状況、ふり取りカードをファイリングするようにし、子ども自身が学習の計画を立てたり、自分の学びを確かめたり、観点別に自己評価を行ったりするようにした。そこで、教師の観察やペーパーテストだけでは、とらえられない子どもの内面的な成長や変容を探ることができると考えたからである。また、ワークシートやノートでの対話、学びの途中の記録、発言、やりとりの中から個に応じた支援を続け、それらを通して学習意欲を喚起できるようにすることが次へのステップになると考えた。

グループ学習の中では、雰囲気作りを大切に、地域の代表なりきりながら話し合うことにより、追究の意欲が高まる場面も見られた。また、グループの中でも、育みたい力に照らして、個人カルテを作り、できるだけ個々の学びをみとり、記録し続けるようにした。

子どもがきらりと光ったとき、それを見逃さないよ

うにするとともに、常に支援の方向を探ることで、子どもが何を学び、どのような学び方を身に付けたのか、見方、考え方、感じ方はどう変わったのかを見届けるようにしたいと考えている。その中で、多くの人々の思いや願いに気づくことができ、和歌山や地域の防災に対する熱い思いの発言へとつながった。

5. 成果と課題

たくさんの先生の中で

「ファイトコーナーってどう？」

心臓はドキドキしていたけど、みんなに提案した。たくさんの先生に囲まれた研究授業だ。わたしは、防災の勉強をして、研究授業まで、そしてそれから6年生のMちゃんにずっと相談してきた。それは、「3Cの中で何度も話し合ってきた防災について聞いてもらいたい」「4年生や6年生からつないでもらった防災のことをわたしも、これからの附属っ子や地域の人につないでいきたい」と必死に思っていたからだ。「お、それいいやん。みんなにつないでいけること考えよう」と賛成してくれる友達の声にホッとした。なんだか体がぼかぼかあつくなっていた。そういえば、4月から、和歌山の勉強をして、どんどん和歌山のことが好きになった。家で和歌山のいろんな話をしたら、びっくりしていた。それに、和歌山のことをしれば知るほど、興味が出てきていろんなことを調べることができた。だから調べ学習が大好きです。そして、防災の勉強をして、4、6年生のみんなやI先生、消防署のOさん、総合防災課のOさんなど、みんなが津波や地震から守ろうと考えて行動していることがすごいと思った。とくに6年生のMちゃんは休憩時間も一緒に手伝ってくれたり、アイデアを教えてくれて、あんな6年生になりたい。それに、これから防災のことを教えられ小学校の先生にもなりたい。そして、防災の勉強をしていない子どもに伝えていきたいな。

本単元では、A児の作文を中心に子どもの変容について記したが、どの子も、多くの人に防災を伝えたいという思いで、地域と人とともに学びを深めた。地域学習にはそれぞれの社会事象の関連付けや、社会認識を大きく変化させるような様々な意義がある。今回、附属小学校の避難所の工事については国からも大きな金額が補助されており、大がかりな工事になっているため子どもたちにとってわかりやすい教材になると考えた。特に家の人や地域の人意識を変えたいという「使命感」をもったことがきっかけとなり、地域を身近に感じまちづくりの一員としての思いをもった。

本単元は、消防事業について追究していく学習である。火災が発生した場合、関係諸機関の相互連携で消火や救助に当たるなど、一刻を争って事態に対処している。火災をはじめとする災害から人々の命や生活を

守る消防事業の仕組みは、携わる人々の工夫や努力、思いや願いによって支えられている。

それらを3年生としてとらえるには、自分事になった切実感のある問いをもって仲間と共に繰り返し調査し、自分にとっての消防事業の意味や働きを考えることが大切であるが、それは決して容易なことではない。そのため、見学の際には、具体的な観察・調査の仕方につながるような助言を行ったり、見取った学び方のよさを全体に紹介したりした。そうすることで、個の考えに応じたより具体的な調査活動を導けると考えた。

ひとり学習の時間を十分保障した分、自分の考えの出したい思いが先行しがちなところも見られた。それだけでは、新たな発想や思考を創造し、学びをデザインする子どもたちの姿がうまれることにはあり得ない。互いの考えをしっかりと受け止め、自分の考え方と比較しながら思考を重ね、自らの考えをさらに深めて表現しあうことによって、新しい価値が生み出されると考えている。そのためにも、教師の「問い直し」や「ゆさぶり」など多くのみとりや支援を大切にしていきたい。

しかし、学習を進めていくうえで、子どもたちの中には実感として現実性や有効性の面からの練り上げが不十分であった。子どもたちにとっては自然災害＝津波と考えている子も多くいたため、もう一度、災害や地震について、和歌山市のそれぞれの地域の特色について考える時間が必要だと感じた。相手の考えをじっくり吟味し、疑問をもてるような子どもを育てるためにも、授業に対する楽しみ方を変える「素朴な目」を大切に伸ばしていくことが大事だと感じた。また、防災の学習を通して“続けること”の大切さを学んだ。子どもたちの防災に対する思いは強く、単元が終わった今も学習を継続している。また、出会った方々とは、その後も交流を続ける予定である。今後も、社会科の学習で学んだことを生かして、地道に、防災の輪を広げ、続け、深めていくことが地域DNAとなると考えている。

参考文献

- 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」
- 安野功(2006)「社会科授業力向上5つの戦略」東洋館出版社
- (2011)和歌山大学教育学部附属小学校紀要No. 34
- (2012)和歌山大学教育学部附属小学校紀要No. 35
- (2013)和歌山大学教育学部附属小学校紀要No. 36